

## 魂に魂を

欲

甲「先生、生きることは、うれしいことですね。」

乙「うれしいことですね。」

丙「ほんとうに、み教えにお会いしなかったら、私どもは今ごろどうなっていたことだろうと、ぞつとします。」

乙「でも、よくそこまで出ましたね。不幸の権化みたようなあなたが。」

丙「実際、力とたのむ子どもにぼつたり死なれた時には、いつそ死んでしまおうかとさえ思いました。それから後も、私の病気やら、主人の死やら、そして続いている問題、み教えに出会っていなかったら、私はどうなっていましたでしょう。」

乙「でも、そうした苦悩があなたをして真剣に人生を考え、道を求めさせたのですから……………」

丙「さようでございます。ご恩でございます。」

甲「確かに、△△さんには感心しますね。まるで、み法を求めにこの世へ出て来たやうな方です、あなたは。」

丙「まあお恥ずかしい。ちつともなっていないません。み教えのとおり、つくづく三毒煩惱の塊であることにあきれます。」

甲「なにぶんにも、この世には楽しみに来たのだといった、欲奴が頭をもたげてきて、欲一つを貫こうとしますからね。」

丙「お話しくださいました、あの涅槃経の一策四蛇のお譬えの中の詐り親しむ者（貪欲）が、またしても私の一番の味方のような顔して出て来ます。昔はそれさえ知らずにひきずられて、苦しまされたものでございます。今は、こやつのおかげで、念仏させていただきます。」

乙「これは苦しいと気がついてみると、必ず貪欲のおかげを蒙っていますね。」

甲「昔は、この貪欲がなくなるかと力んで見たものですがね。」

乙「それもやって見たから、無くならないことがわかったのですよ。頭から、貪欲だけでいいのなら、聞法も、求道も、生活もあったものではありませんからね。」

甲「貪欲が、俺の全体であることがわかった時には、まったく驚きましたね。だが、その時、すうつと一切の疑いが打ち破られて、思わず脳天から、骨の髄まで、打ちぬかれたほどの喜びを感じました。でもそれただの一瞬です。相変わらずの泥凡夫ですが、おかしいのです。人生には、あまりたいした問題はない気がしませんでした。欲になりきって見ると、欲もさほど恐いものではありませんね。今考えると知らなかった昔の方がこわかったのですが、その時には、ちつとも怖れてはいなかったのですからね、『貪欲、貪欲を知らず』とはまったくもって真実です。」

くい

丙「私どもは女でもあり、老人ですから、あまりお仕事もできませんが、△△さん、しつかりたのみますよ。」

甲「やりましようぞ。だが、もののわからん連中から、つまらない愚にもつかぬことを言われると、癪にさかりますね。」

乙「そりやそうだ。無理もない。私だって、長い間、ずいぶんやられたし、今もやられていますが、気持がいいことはありませんね。しかし、それよりも、もつと強いものがよびますでね。」

甲「そうです。その声がどうにもなりません。何と言われても………しかし、今度〇〇が〇ちましたについて、人の心がよくわかりましたよ。今までは、一つ心だと思つていても、いざ〇となると、たちまち正体を暴露して逃げてゆきますね。真の同胞というものは少ないものですね。」

乙「そりやそうですよ。そこになるとちつともごまかせませんからね。つまり欲で集まった者は、最後の日には別れなくちゃならなくなるのです。」

丙「凡夫は、小さいものに囚われて、大きなものを失うものでございますね。つまりは、私どもは欲の少ない方であるかも知れません。あなたがたの方が大欲なのかも知れません。ホホ………」

甲「ハハハ………俺たちも、その少欲の方ですな。大欲が小さいことに囚われて、大きなものを失うのです。欲はおもしろくて、命まで投げ出せと言わないでも、金を少し出せと言つても、バラバラッと逃げてゆく。人間を逃げさすのは造作はいらない。」

乙「大地に打ちこまれた一本の杭なら、風が吹いたくらいでは倒れません。大地に打ちこまないで、欲の網で引張つてあるのでは、一本倒れはじめたらみな倒れます。2 お互いにうんと六字の槌で打つていただいて、ぬけず倒れない柱になりましょうね。杭になりましょう。」

丙「私は何と小さい弱い杭ですこと。」

乙「小さくも、弱くもありません。りっぱな堂々たるくいです。私は、大和民族は賢いと思ひます。現在のこの苦しい社会状態において、よくもじつと苦しみに堪え忍んでゆきます。日本の解決は日本の中からしか生まれはしない。日本や、社会から自己を抽象して、不平や、愚痴を爆発させていたつて、解決にはならない。上層階級がいろいろな醜い相を毎日のように暴露している時、それらの生き方とは違つて、日本の苦悩を一荷に背負つて、日本と一体になり、社会と一体になつて、蟻のように精励に、海原のような底力をもつて生きているのは、農民です。農民こそまことに日本の国柱です。無名の国柱です。そして農民には良心が生きています。真の宗教も農民にあります。ですから、農民の動きが社会の動向を決定するので。一切をソロバンで受けて魂で受けない人間、その集団は強いようでも弱い。私どもの運動はどこまでも、魂をもつて魂を打つ運動でなくてはならない。物をもつて魂を曇らしてはならない。魂を名利や地位などで打つてはならない。杭とは金剛不壊の大信心の人です。私は、釈尊や親鸞聖人などは、宇宙の柱だと思ふ。いやどうも話したいへん大きくなりました。」

たましい

甲「先生、光明団の運動は少しおとなし過ぎると思います。もつとしつかり破邪の剣を振るわれたのがいいと思います。」

丙「でも先生のお話はきびしすぎると言う人がありますよ。」

乙「どちらがほんとうでしょうかね。」

甲「しかし、△の△△が、ずいぶんと腐れきつていながら、光明団を聞くと地獄へおちると、おどしつけるのです。そして一度だつて聞いたこともなくせに。結局、商売敵だと思つていのですからね。」

乙「まあ、そういちがいに言い給うな。△の中にもずいぶん目覚めた人もあるのだから。」

甲「私は、うんとやつて……………」

乙「しかし、一切の問題の解決は、最後に魂の自覚、しびれた心の復活、それよりほかに本質的な解決はありえない。民衆の魂の成長、開発、それを妨げ得る何ものもありません。私どもは、依然として大衆の魂の雄叫びの力を生かさねばなりません。無意味な屈従や卑怯な謙虚が無意味であるように、素朴な焦土主義や破壊主義もだめです。腐つた組織を代表するものが、いかに集まつて、得手勝手な決議や、申し合わせをしたところで、それは何にもなりません。功利的な欲心などとする反動運動などはけつして恐るべきではない。徹頭徹尾、真実のみ恐るべく、尊むべきであります。われらは、人生の苦悩を負いきつて、真実なる者の声を聞いて生きさせていただきましょう。それに越した運動も方法もありません。じりじりと、頭をもたげる大きなうねりのみが最後に勝つのです。もし、自己を忘れて、単なる運動にのみ走りますと、また大きな墮落が見舞つています。だからといってけつして、独善の化城にとどまつていてはなりません。真剣な歩みの中からのみ、それに値するものが生まれてきます。恵まれてきます。」

甲「よくわかりました。つまり私自身をもつともつと培うしかありませんね。」

乙「そうです。若葉のような澁刺たる情熱を、意志を不断に培つていただきましょう。」

甲「しかし、私どもは、黎明に立つていようような気がします。いかに苦しくても。」

乙「歩む一道に変わりはありません。恵まれても、恵まれなくても。道が一本になると、楽なものです。」

丙「ほんとうにありがとうございます。方々にいなざる尊い杭にまけないように、精進させていただきとうございます。」

乙「ぼつぼつもう始まります、これでおきましよう。」